

解題 アントニオ・ネグリの〈大都市〉論

——コモンとして、すなわちコミュニズムとしての「都市への権利」は可能か——

北川 眞也*

Shinya KITAGAWA

On the Metropolis of Antonio Negri: Is the 'Right to the City' as the Common, or Communism Possible?

- ・アントニオ・ネグリ、フェデリーコ・トマゼット「社会的協働のコミュニン—アントニオ・ネグリへの〈大都市〉についてのインタビュー
- ・ウーゴ・ロッシ「〈大都市〉について、ネグリへのコメント」
- ・アントニオ・ネグリ、フェデリーコ・トマゼット「〈大都市〉のコモンなる肺—「社会的協働のコミュニン」への補遺としてのネグリへのインタビュー」
- ・アントニオ・ネグリ、フェデリーコ・トマゼット「一般的知性の住まい—アントニオ・ネグリとの対話、現代〈大都市〉に住まうことについて」

a. これら4つの訳文は、〈大都市〉metropoliをめぐるなされたアントニオ・ネグリへの3つのインタビューと、ウーゴ・ロッシによるコメントからなる。これらは、ネグリも深く関与する「エウロノーマデ EuroNomade」という、1960年代のオペライズモ（「社会的協働のコミュニン」の訳注3を参照）の戦闘的遺産を引き継ぎ、現代左翼の知的・政治的再構成を図るコレクティブのウェブサイト上に掲載されたものである。ネグリへの3つのインタビューはいずれも、政治思想の研究者であり、主に暴力についての研究をすすめてきたフェデリーコ・トマゼットによってなされている。トマゼットには、*La violenza. Saggio sulle frontiere del politico* [暴力—政治的なもののフロンティアについての論考] (2015) や、*La violenza e la città* [暴力と都市 (2017)] などの著書がある。

ちなみに、インタビューの行われた時期は、2014年1月から2015年6月であり、2011年来の世界各地の闘争における都市の次元がなおも注視されていたときにあたる（現在もそうだ）。それゆえ、これらのインタビューには、ネグリによる現状介入的な意味合いも大いにある。しかし、以下でも簡単に触れるよ

うに、その土台には、現代資本主義における価値増殖と蓄積の過程を解説し、破壊・転覆するための存在論に基づいた理論的枠組みがしっかりと据えられている。この枠組みにとって、さらには労働の敵対性にとっての特権な時空が、〈大都市〉なのである。

加えて興味深いのは、ネグリの一つ目のインタビューに対して、地理学者・都市研究者のウーゴ・ロッシによる批判的コメントがなされたこと、ネグリの二つ目のインタビューが、それへの応答にあてられていることである。トリノ大学のロッシは、資本主義と都市空間の関係性について長らく研究を行っており、イタリアのみならず、英語環境においても数々の研究を公表してきた。（著書に*Cities in Global Capitalism* (2017)、*Urban Political Geography* (2011)、アルベルト・ヴァノロー Alberto Vanolo との共著）などがある。ロッシは、エウロノーマデにも積極的に関与している。彼は、ネグリの都市の定義に一定の評価をくだしつつも、オペライズモの視座や方法論とは、いくぶん異なる点から問題提起を行っている。

b. アントニオ・ネグリの名が、日本語環境において広く知れ渡ったのは、マイケル・ハートとの共著である『〈帝国〉』の出版（日本語では2003年、英語原著は2000年）以後のことであろう（それ以前から、『インパクション』誌などが伝えていたことを忘れてはならない）。かれらが〈帝国〉と呼んだのは、資本のグローバリゼーションを統括するグローバルな主権形態であった。かつての領土に基づいた国民国家とその帝国主義とは異なる、脱領土的で異種混濁的な政体構成をもつグローバルな主権が、地球を覆っているというわけである。世界は〈帝国〉のもとに包摂される。それゆえ、〈帝国〉への対抗運動も、マルチチュードと呼ばれたグローバルな民衆も、おのれを

* 三重大学

グローバルな対抗権力として形成せねばならない。これは、当時展開されつつあった「諸運動の運動」たる「グローバル・ジャスティス・ムーブメント」の動向と機を一にするものでもあった。

しかし、〈帝国〉、マルチチュードという圧倒的にグローバルな水準での問題提起を前にすると、かれらがどれほど存在論や主体論、人間存在の潜勢力＝労働力という視座から議論を開始しようとも、それが抽象的にすぎるくらいがあったのは否めない。その壮大な議論から引きだされたひとつの結論が、〈帝国〉はグローバルであるから、どこにでも存在しているのというもの、そして、〈帝国〉はどこにでもあるから、どこにおいてでも抵抗は可能である、という空間論的には曖昧なものであった。

原理上、たとえこのように言うとしても、この言明は政治的にはさらに問題をはらんでいた。というのは、闘争、階級闘争が、どこで先鋭化するのか／させられるのかという問い、どこが敵の弱点なのか、どこが労働力の戦闘性をもっとも発揮されるのかという戦術的な問いを置き去りにしてしまいかねなかったからだ。

ここにおいて、ネグリの議論の俎上に載せられたのが、〈大都市〉だ。〈大都市〉は、資本にとっても労働にとっても、何より政治的変革にとっても、圧倒的に重要な場所として設定される。地球規模の主権権力たる〈帝国〉を論じるネグリの姿からすれば、都市を論じるネグリ、ネグリの論じる都市というのは、いくぶんイメージしづらいかもしれない。しかし、いずれのインタビューにおいても、「工場から大都市へ」、「労働者階級からマルチチュードへ」という流れが極めて重視されていることから推察されるように、都市は、ネグリの思想の欄外に置かれてきたわけではない。

c. イタリアでは、図式的に言えば1973年あたりから、「アウトノミア」と呼ばれる数々の異質な運動が登場する。これらの運動が展開された場所、これらの運動が政治的標的として設定した場所。それが、都市／大都市であった。象徴的には、新左翼集団のロッタ・コンティヌアが、「都市を奪取せよ」と題した政治的実践をすでに1970年に掲げていたこと、(ネグリが高く評価した)ミラノの運動紙『ロッツ』第8号(1976年)の表紙に、「大都市に抗する労働者」というイラストが掲載されていたことなどが注目されよう。家賃ストライキから空き家占拠、政治的・文化的・社会的な目的をもった占拠、「プロレタリア流ショッピング」と呼ばれたレストランやスーパー

(高いワインやチーズ、キャビアも)、映画館、交通機関などでの自主値引き運動。「ここからの問題はこうなるだろう。どのようにして大都市に攻撃を加えるのか？」このように述べ、この時代を振り返るインディペンデントの研究者マルチェッロ・タリによれば、アウトノミアにおいて体现されていたのは、「大都市よりもはるかに力強いコミュニズム」だったのだ(Marcello Tari, *Il ghiaccio era sottile. Per una storia dell'Autonomia*, Roma: DeriveApprodi, 2012)。

オペライズモは、しばしば「工場至上主義」として批判される。工場ばかり、工場のみを反資本主義闘争において特権化しすぎていると。実際、ハーヴェイはネグリをそのように批判している。しかし、それは高度なテクノロジーを備えた新たな資本主義の姿が、当時ももっとも露骨に発現していたのが、工場にほかならなかったから、そして何より、資本主義に対してもっとも敵対的な主体が潜在したのが、工場にほかならなかったからである。オペライスタたちは、既存のストライキを「無駄」とした労働者の振る舞いのなかにそれを、敵対性の「傾向」を見出したのだ。

とはいえ、オペライズモは、その当初から「社会工場論」(1962年、マリオ・トロンティ)を提出するなど、工場と社会との関係性にも目を向けてきた。この趨勢は、1970年代半ばになると、「工場から社会へ」の移行として積極的に、また別様に論じられるようになる。ここで強調されたのは、闘争の場が社会へと、いわば再生産をめぐる領域へ、地区やコミュニティの領域へと単純に拡大されたということにはとどまらない。オペライズモ(労働者主義)は、その名のごとく、労働にこだわる。それゆえ、これら社会に遍く広がりゆく政治的主体性を、あくまでも労働、労働力の生産、価値の生産という観点からまなざすのだ。学生は労働者である、主婦は労働者である、失業者は労働者である。これまで不生産的な行為(労働)とみなされてきた様々な主体の活動は、価値生産的なのである。ときに政治的言語でこのような要求も行うが、それ以上に、このようなやり方で生きる、このような生の形式を創出する無数の主体性が湧きあがってきたのである。

「失業率は若者において高く、このときはじめて不安定労働が広がりはじめた。運動が求めていたのは、完全雇用ではなく現金だ。合法違法を問わず占拠、領有、商品の共有化が広まる。家、衣類、日用品に至るまで、若者達はありとあらゆるものを共有した。人々は働く量を少なく、歓びのための時間を

多くとった。そこにはまったく犠牲の感覚はなかった、不景気にもかかわらず、貧困も禁欲もなかったのである。豊かになるということは、消費する物の所有量とはみなされず、楽しむ時間をもつこととみなされていた。豊かになることは大金持ちになることではなく、働き過ぎずに生活に困らないことだった」（フランコ・ベラルディ（ピフォ）（櫻田和也訳）『プレカリアートの詩』河出書房新社、2009、30頁）。

こうした主体性の工場から社会への広がりによって示されるのは、社会全体が価値生産的なものであること、集団的な生それ自体が価値生産的なものであることだ。「家事労働に賃金を」、さらには社会的賃金の要求は、おのれの労働力商品価値を高めることで、資本の側に最大限の負担を負わせつつ、自らは賃労働関係から離脱するというアクロバチックな「労働の拒否」だった。

このような主体性を、ネグリは1970年代に「社会的労働者」という新たな形象として提出した。テイラー主義下の労働者形象である「大衆的労働者」ではなく、それとはまったく異なる「社会的労働者」が出現しているのだと。この労働者は、社会的である。つまり、おのれの知性、言語、感情、創造力を通して、自律的なやり方で知とコミュニケーションを生産し、社会関係を形成する力量を有している。加えて、賃労働を束縛ととらえ、労働を人生のすべてとはとらえない価値観を有していた。これは、まさしくアウトノミアの無数の運動に参加していた若者たちの体現するものであった。ならば、資本は、このような力量をかすめとるべく自己変革を行う。工場にさようなら、大衆的労働者にさようなら。これからは、これらの自律的・社会的・認知的な労働者が資本の標的である。かれらの欲する自由を商品価値の言語へ、かれらの欲する自由を不安定雇用へと翻訳し、かれらを飼いならそう。一般的知性の社会全体が価値生産的だとすれば、あとはそれを包摂し、そこから価値を抽出するだけ、「採掘」するだけだと言わんばかりに。

このような集団的主体性が構成され、さらにそれを捕獲しようと資本が自己変革を成し遂げてきた特権的な場所が、都市／大都市なのだ。それゆえ、「工場から社会へ」への変転は、「工場から都市へ」の変転でもあったと言えよう。

d. 今回訳出したインタビューで語られているのは、まさしくこのような事態がさらに深遠なものとなった状況である。大衆的労働者を集中させた都市の内部では、プロレタリア諸地区が形成されたわけ

だが、敵対性を潜在させるこれらの地区は解体され、資本蓄積に都合のよい都市（グローバル都市、クリエイティブ都市など）が整えられてきた。資本による都市の奪還である。ジェントリフィケーションに象徴されるように、都市を改変する暴力は全面的に展開される。一見すると、都市は消費、集客、スペクタクルの場となり、一糸乱れぬスムーズな人、記号、商品、カネの流れる場所へと全面的に改変されるようである。これらの都市環境は、とりわけ、都市を包摂するデジタル・ネットワークとそのテクノロジーによってスマートに制御されている。都市でその生を営む万人が、このネットワークの一部として、この流れのリズムと広がりの中かで、社会関係を、欲望を、主体性を形成する。そこにおいて、ウーバーUberなどの駆動させるシェアリング・エコノミーのもと、借金を抱えた不安定な認知労働者たちは、いかなる外的な労働の組織化もなしに、スマホやアプリを用いて、自主的に協働しては、集団的な富（知やサービス）を生産する。すなわち、資本のもとで自律的に都市を生産するのだ。都市はこのような社会的協働で充満している、このように生産されたコモンで充満している。と同時に、このようなコモンを採掘する資本の流れで充満している。

しかし、ネグリからすれば、このような都市像を全体化するなら、それは端的にブルジョワ・イデオロギーである。都市において、所定のフォーマットのなかで、サービス、感情、知、コミュニケーションを生産し続けるプレカリアスな認知労働者が存在する限り、認知労働の協働とそこから生まれる様々な生産物が採掘される限り、そこは潜在的に敵対性にあふれた場所なのだ。金融資本による都市の採掘は、断じてスムーズではない。そこには数々のでこぼこ、数々の亀裂、断絶、拒否があるはずだ。

インタビューで触れられる「加速派政治宣言」をめぐる議論でもそうだが、デジタル・ネットワークの機械状装置に組み込まれた人間の脳、身体、精神についても、ネグリは否定性へとつながる全体論を退ける。このネットワークの速度と情報量によって、感情を虚脱させられ、攻撃性を増幅させるしかない人間の悲劇的姿を注視し、資本の論理に侵されたこうしたテクノロジー（とりわけその刺激）を否定的にとらえるフランコ・ベラルディ（ピフォ）のような立場と、ネグリは異なる。ネグリは、テクノロジーによって所定の人間存在（本質とまで言わなくとも）が破壊されるとする類の議論を徹底的に退ける。なぜなら、こうした機械状装置に包摂されることで、人間存在は改変されるから、さらには、おのれをす

すんで改変していくものだからである（ネグリのいう人類学的発展である）。

このあたりは、ネグリが都市において顕著に表出されると考える「固定資本の領有」という議論に明らかだ。労働者が固定資本へと吸収されたというよりも、ネグリからすれば、労働者が固定資本を領有したのだ。固定資本は、労働者の身体と脳のうちへ、一般的知性のうちへと統合された。だからこそ、労働者は資本に対して優位な位置にいる。だからこそ、オペライズモの教えのように、労働者はなおも資本に対して先行している。だからこそ、労働者は、資本とは別様にこれらのテクノロジーを「使用」できる。しかし、忘れてはならない。このような理解を可能とするのは、ネグリの知的営為のためだけではない。それは、このような関係のただなかに潜在する敵対性、様々な表現で爆発する敵対性、金融資本に害悪を与える敵対性のためである。

e. また2008年の危機以来、ギリシャ、スペイン、イタリアなどの、ヨーロッパ諸国で出現する生き延びるための様々なサービス、助けあい、骨の髄まで収奪、採掘された認知労働者たちによる相互共生の政治性を、ネグリは認識する。これは慈善事業でも、資本と労働の関係の外部でなされる福祉事業でもない。労働、さらには住宅、食事、子育て、借金、移民の受け入れなどをめぐって、地区のレベルで頻繁になされるこれらの自主管理活動は、どれほどその生が資本にとって再生産に値せずに、徹底的に低く見積もられた労働力であったとしても、それぞれの生を自己価値形成する階級的かつコモンの実践なのである。ネグリは、都市の社会的領域を横断するこれらすべての認知労働者、社会的労働者の「社会的サンディカリズム」に、地域的な対抗権力としての跳躍を求める。金融資本とそれを可能とする政治権力に敵対し、それを破壊するような、対抗権力の跳躍、闘争の垂直化を求めるのだ。

ちなみに、都市に、認知労働に直接従事する以外の様々な労働者が存在するというのは当然である（ロッシのコメントの論点1に関わることだ）。それでも、ネグリが「認知労働者」に政治的にこだわるのは、それが現在にまで至る資本と労働の歴史的な闘争の物質性のただなかに位置しているから、このプロセスのなかで出現してきたものだからにほかならない。認知労働は、生が、一般的知性が価値生産的である（＝万人が認知労働者）ことをもちろん含んだものだが、あくまでもこのような歴史的闘争の現在における獲得物であり、だからこそさらなる政治的

飛躍はそこから可能であるという観点のもとで用いられているようにも思われる。

f. このように述べてきたとはいえ、ネグリの〈大都市〉をめぐる議論においても、〈帝国〉と同様の問いは残っているのかもしれない。なぜなら、「プラネタリー・アーバニゼーション（地球の都市化）」のもと、都市と農村の区別が消失し、いっさいが〈大都市〉になるのであれば、それは世界全体が〈帝国〉に包摂されるとする分析と同様の結論にもなりうる（都市は、帝国とはまた別の系譜をもつ概念ではあるだろう）。

ネグリは、都市空間の分割を強調する議論に対しては批判的な距離をとっている。ファヴェーラやバンリューに言及するにしても、それらが、資本の内側に包摂されている事実、さらにはコモンの生産に関与している事実をまずは強調する。あくまでもこの内側において、様々な空間的ヒエラルキーが形成されているというわけだ。この認識は的を得ているように思われる。しかしそれでも、空間論的転回を経た視座からすれば、空間の分割、あるいは都市空間のなかで多数化する境界をめぐる問いが見過ざれているようにも思われる。サンドロ・メツァードラとブレット・ニールソンの議論を敷衍すれば、それらの分割・境界は、都市をはるかに越えて広がる、多数の物質的・非物質的な「回廊corridor」と、それらに接続された無数の「飛び地enclave」からなる、まさに地球規模で展開される生産と流通の可動的かつロジスティカルな空間性によって実現されているものでもあるからだ（Sandro Mezzadra and Brett Neilson, *Border as Method, or, Multiplication of Labor*, Durham, NC and London: Duke University Press, 2013）。プラネタリー・アーバニゼーションとは、このような現象の帰結でもあろう。翻ってネグリにおいては、スムーズで滑らかな都市の空間性がイメージされているようにさえ見える（多少強引であるが、ロッシの論点2にも関わる）。コモンと境界は、確かに相対立するとはいえ、両者のより込み入った関係性は見過ざれている。

ネグリは生産、社会的協働の集中的な場として都市をとらえ、そこでなされる採掘、ならびに生きた労働の解放を問題化するわけであるが、上述の空間をめぐる理解は、当のその社会的協働自体がまるで所与のように設定されていることとも関わろう。この協働がいかんして形成されるのか、協働の質がいかなるものであるのかは、ほとんど問われない。ここでは、逆説的ではあるが、無数の社会的協働が自

動作用で生産され、機能するものとして設定されてしまっていないだろうか（先ほどのメッザドラとニールソンなら、特異性の協働過程を検討するべく、ここにおいて「翻訳」という概念を導入するだろう）。

ネグリの論は、都市の緻密な空間論、あるいは都市空間論というよりも、都市という容器において展開される生産と搾取・採掘をめぐる議論、現代資本主義をめぐる議論であるのかもしれない。このあたりは、空間論的転回を先導してきたハーヴェイらの議論とは趣を異にするところだろうか。しかし、ハーヴェイの議論には、オペライズモにとって、ネグリにとっての「労働力」という概念、つまり、革命の潜勢力としての存在論が決定的に欠けている。そこにおいての敵対性は、いつも資本主義システムの発展という合理性の内側にとどまる。

「空間の生産」論をふまえつつも、ネグリ流に問いを立てるなら（大雑把である。解題の内容を越える主題である）、「社会工場」としての大都市空間が、資本主義のもとで、否、資本と労働との敵対性のもとで、いかにして生産されるのか。いかなる労働者主体が、〈大都市〉のいかなる空間をめぐる敵対性を激化させるのか。それら様々に境界づけられた空間をおのれのものとして、コモンとして、いかに生産、領有するのか。それを通じて、資本主義的諸関係をいかにして転覆するのか、だろうか。このような問題意識からすると、ネグリが提出する「領域的 [= 地域的] な対抗権力」、これは1970年代の運動において言葉にされていたものであるが、この「領域的 [= 地域的] な対抗権力」というアイディアは、興味深いものであるのかもしれない。あらゆる革命には、領有された空間が不可欠なことから、「領域的 [= 地域的] 自主管理 *autogestión territorial*」が不可欠なことから、すなわち空間の革命が不可欠なことから（Henri Lefebvre, *L'esplosione degli spazi* (Massimiliano Guareschi e Federico Rahola, a cura di, *Forme della città: sociologia dell'urbanizzazione*, Milano: Agenzia X, 2015), pp. 43-56)。

それが「構成する権力 *potere costituente*」であるのか（ネグリまたEuroNomade）、「脱構成する潜勢力 *potenza destituente*」である（たとえばアガンベンやタリ）のかという激しい対立をはらんだ問いはひとまず別にして。

g. さて、ここにおいてルフェーヴルである。ネグリはインタビューのなかで、ルフェーヴルの「都市への権利」を、過去の文脈に属する言説としている。

現在の〈大都市〉における認知労働者の階級構成、そして価値増殖や蓄積のあり方を考えるなら、この言説はまったく異なる時代、いわば大衆的労働者の時代のものであると。しかし、コミュニストたるネグリが、唯一そこにおいてなおも肯定的に言及しているのが、「出会い」という部分だ。ただそこにおいてのみ、ネグリは「都市への権利」の現代的意義を見出しているようである。ネグリの言う〈大都市〉においても、出会いはあらゆる集団的かつ政治的主体形成にとって、そして現代の階級闘争にとって、本質をなすわけである。

出会いは、可能なのだろうか。多数化する境界によって遠ざけられるのみならず、スムーズな流れ、フォーマット化された流れが加速し、その流れのなかを流動し、ともすれば、すれ違うことしかできない認知労働者たちは、いかにして出会えるのだろうか。オペライズモの格言を取り戻して言うなら、出会いは、この関係の「内部 *dentro*」において、この関係に「敵対 *contro*」してなされる。この関係の内部から、それに抗する独自のリズム、独自の空間性を創出するプロセスのなかで、それを可能とする主体形成プロセスのただなかで、「出会い」は成し遂げられる、「喜び」は共有される。これこそがコモンの土台であり、採掘、また「所有」という都市を牛耳る資本主義を打破するためには、コモンの蜂起のためには必要なものなのだ（このあたりはロッシの提示する論点3に関わる）。

これは、2011年来の世界各地の都市的闘争のなかで賭けられたもの、実行に移されたものではないのか。「都市への権利」を掲げてなされた闘争のなかで。

謝辞

ここで訳出してきた4つの文章の翻訳・公表を快く認めてくれたEuroNomadeコレクティブ、特に、フェデリーコ・トマゼッロ、トニ・ネグリ、ウーゴ・ロッシに感謝いたします。